

2023年9月27日、第9回マツダ財団オンラインサロンを開催しました。

今回のテーマは“「地域おこし協力隊」について”です。発表者は、2021年に青少年関係研究助成を受けられて研究中の長岡造形大学大学院准教授板垣順平先生と2022-2023年度市民活動支援の一般社団法人まなびのみなどで活動されている現役の地域おこし協力隊員である勝瀬祐介さんです。

まず全参加者の紹介に始まり、板垣先生、勝瀬さんに発表していただいた後、参加者からの質問に対し、お二人から回答いただくという形で進めました。



板垣先生からは、長岡市と長岡造形大学大学院の連携事業である地域おこし協力隊制度を活用したイノベーター育成プログラム(通称：いのプロ)について発表していただきました。地域おこし協力隊として活動すると同時に、大学院生として研究をする“半学半域型”制度をデザインされています。大学院は2年制で、1年目

が「活動模索期」「活動試行期」2年目が「活動展開期」「活動収束期」として取り組みを進めます。

具体的に、第3期生で現在大学院2年の佐々木さんから、いなりずしを食べながら少人数で対話するコミュニティカフェ「居なりすん」や、大学生が小学生に勉強教え、一緒に遊ぶ「いのプロ寺子屋」の活動の紹介をしていただきました。人をつなぐ居場所設計が素敵です。



勝瀬さんからは、大崎上島町の“大崎海星高校魅力化プロジェクト”について発表していただきました。地域おこし協力隊員として、統廃合の危機にあった学校の中に、町が運営する公営塾を作り、その運営スタッフの立場で活動している事例や、「生徒の“やりたい”を全力でサポートする企画」などの紹介がありました。

加えて、所属されている“まなびのみなど”と、高校生と一緒に取り組んでいる“ミカタカフェ”の運営を紹介いただきました。この取り組みは、高校生が主体となって小中学生、地域の方、大学生、他地域の方との交流拠点、小・中・高・高専生が自習するための場所を整備・運営するものです。一般社団法人まなびのみなどは、地域おこし協力隊の任期が



終わっても活動が続けられる職場として作られたそうです。

質疑応答で、板垣先生への質問は、“学生にとって研究と協力隊業務の両立はハードルが高くないか？”や、“他地域や、一般の地域おこし協力隊への汎用性があるか？”などの質問があり、勝瀬さんへは“高校の在校生や卒業生の変化はどうか？”や、“高校への入学希望者が増えたきっかけは？”などがありました。



お二人に共通の質問としては、“認知度を上げる工夫は？”などがありました。また、安芸高田市の向原高校でも同様の活動をしているので参考にしたいとの質問に、勝瀬さんから、生徒募集の具体的な事例紹介がありました。悩みや課題をもって取り組みをされている方にとっては、とても有用な情報共有になったのではないかと思います。加えて、来年度長岡造形大学大学院に入学予定の方から、“大崎上島へ見学に行きたい”との発言があるなど、今後の交流にも弾みがつくサロンになったようです。ご参加の皆様、ありがとうございました。



＊ ＊地域おこし協力隊とは、総務省が所管する制度で、都市部から過疎地域へ移住し、地域おこし支援や地域協力活動を行う人材のことで、任期は概ね1～3年で、地方の課題を解決し、地域の活性化に貢献し、地方定住を目指す取り組みです。地域おこし協力隊は、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR、農林水産業への従事、住民支援などの幅広い分野で活動しています。

このマツダ財団オンラインサロンは、コロナ禍で急速に普及したオンライン技術を活用し、今まで支援した団体や研究者が取り組む社会課題からテーマを選定し、そのテーマに応じて関係者を募り、意見交換する場です。テーマに興味を持つ団体と研究者を繋ぎ、より深くそのテーマについて議論することで、お互いに気づきが生まれ、少しでも社会課題の解決に繋がってくれればと願っています。お気軽にご参加ください。（佐々木）